

国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM



Contents

国際青年育成交流事業(討議セッション・地方プログラム)……	2
ターニングポイント……………	7
ギニア 達の恩返しプロジェクト……………	10
山梨県青年国際交流機構の活動……………	12
茨城県青年国際交流機構の活動……………	13
京都府青年国際交流機構の活動……………	14
熱い思いをスリランカへ！……………	16
外国参加青年から見た日本……………	18
SWYAAインターナショナル・リユニオンのお知らせ……	19
グローバル・フォト・コンテスト……………	20

マクロコズム
2005.11 vol.67

(財) 青少年国際交流推進センター

「討議セッション」

「討議セッション」は、国際青年育成交流事業（外国青年招へい）のプログラムの一環として、世界11か国から招へいた外国青年約100名と、国際的な問題に関心の深い全国からの日本青年約60名が、6つのテーマ別のグループに分かれて率直な意見交換、各テーマに関する知識の向上、国際的対応力を身につけることを目的として実施されました。

■6コース：環境、情報、企業の社会貢献、教育、ボランティア活動、伝統文化

■参加国：カナダ、チリ共和国、ドミニカ共和国、グアテマラ共和国、ハンガリー共和国、ヨルダン・ハシェミット王国、カザフスタン共和国、ミャンマー連邦、ノルウェー王国、セネガル共和国、チュニジア共和国

日程	プログラム
7月12日(火)	日本参加青年オリエンテーション、ディスカッション講座、全体交流会
7月13日(水)	外国青年と合流(ランチ・レセプション)、グループ別ディスカッション、ナショナル・プレゼンテーション
7月14日(木)	課題別視察(グループ別)、グローバル・ステージ&カフェ
7月15日(金)	グループ別ディスカッション、成果発表会準備
7月16日(土)	成果発表会、修了式



経済同友会 北城恪太郎代表幹事と懇談(企業の社会貢献コース)



真剣に話し合う参加青年(企業の社会貢献コース)



NPO ふうど(小川町)を訪問(環境コース)

環境コース コーディネーター

第17回「世界青年の船」事業参加青年 田中 啓介

参加青年が帰国後、何ができるのか考えた末、アクションプランをまとめた。ひとつのキーワード「5R」-Reduce(消費削減)、Reuse(再利用)、Recycle(資源再利用)、Repair(修理)、Reverence for Nature(自然への畏敬の念)に集約したのだ。生活習慣も生きる環境も異なる参加者が、最終的にはひとつの答えを選択。目指すべき方向が同じだと強く感じた。

「発見」と「苦悩」の5日間が大きな糧となったことは間違いない。今後も積極的にこのような議論の場にかかわっていきたい。この2つを肥料として、次回はもう少し大きな芽を出すことにしよう。この事業にかかわることができためぐり逢いに感謝して。



模擬授業を体験（教育コース）



熱心に討論する参加青年（情報コース）



干菓子作りを体験
（伝統文化コース）



NTTインフォリウムを訪問（情報コース）

伝統文化コース コーディネーター
第8回「世界青年の船」事業参加青年
永井 美雪

江川アドバイザーやスタッフの活発な意見交換と企画・実行力、参加者のクリエイティビティにより、「伝統文化」というテーマを、自分自身の価値観をみつめながら語り合うことができました。

日本青年も外国青年もそれぞれが持てる力を出し、ちがう意見を尊重しあい、語学力が足りなければ助け合うなど、すばらしいチームワークを発揮しました。参加者・スタッフの一人一人がいとおしくて誇らしく、修了式のときには涙がとまりませんでした。

「討議セッション」を通じ二つの発見がありました。ひとつは、自分があつくなれること、感動の場をつくること、人が輝く瞬間に立ち会うのが大好きだということ。もうひとつは、その輝きが自分も輝かせてくれるのだということ。スタッフならではの醍醐味でした。



討議内容を発表する参加青年（ボランティア活動コース）

国際青年育成交渉事業（討議セッション）

民族衣装で
各国の青年が
勢ぞろいナショナル・
プレゼンテーション

カザフスタンの踊り

グローバル・
ステージ&カフェ日本参加青年と
外国参加青年の
有志による合同発表

ハンガリーの展示

成果発表会で発表する
参加青年（環境コース）

成果発表会・修了式

発表を真剣に聴く参加者



「地方プログラム」

外国参加青年は7月18日～25日の間、4府県（滋賀県、京都府、大阪府、鳥取県）に分かれて地方プログラムに参加しました。各地では表敬訪問をはじめ、様々な交流プログラムや施設訪問を行い、また、2泊3日のホームステイも実施されました。

訪問府県名	国名(人数)
滋賀県	チリ(10名)、ハンガリー(10名)
京都府	カナダ(8名)、ドミニカ共和国(10名)、チュニジア(8名)
大阪府	グアテマラ(8名)、ヨルダン(10名)、セネガル(8名)
鳥取県	カザフスタン(5名)、ミャンマー(10名)、ノルウェー(8名)

滋賀県

國松善次知事を表敬訪問



三味線のレッスンを受ける外国青年

石部小学校の児童の手ほどきで書道に挑戦



京都府

和太鼓を体験



さよならパーティーで
ホストファミリーと共に

京都府立洛東高校で生徒と交流



Farewell Party in Kyoto



大阪府

地元青年との交流



ウェルカム・パーティーでのパフォーマンス「殺陣」



コンペイトウミュージアムで金平糖作りを体験

鳥取県

鳥取砂丘を散策する青年たち



藤井喜臣副知事を表敬訪問



ちくわ工場での体験研修



高屋敷雪乃さん

(旧姓：宮下)

第17回「日本・中国青年親善交流」事業
参加青年



高屋敷さんは平成7年度第17回「日本・中国青年親善交流」事業に参加後、在外公館派遣員として北京の日本大使館で2年間勤務、現在は、外務省大臣官房人事課で御活躍中です。中国語を学ぶことになったきっかけや、「日本・中国青年親善交流」事業が高屋敷さんに与えた影響、外務省でのお仕事についてお話をうかがいました。

どんなきっかけで中国語を学ぼうと思ったのですか。

小学校6年生のときに、NHKで「楊貴妃」を取り上げた子供向けの教育番組を見ました。楊貴妃の衣装がすてきで、「楊

貴妃に会いたい!」と思ったほどでした。また、テレビで人形劇の「三国志」を見て諸葛亮孔明のファンになり、中国の歴史に対するあこがれが芽生えました。

高校生のとき、旅行が好きだったので旅行関係の仕事に就きたいと思うようになりましたが、そのためには英語を勉強しなければと思い、英米語学科のある大学の受験を考えていました。でも、英語が好きではなかったので、英語を勉強することに乗りがしませんでした。

すると、母が「そんなに英語が嫌いなら、思い切って中国語を勉強したら」と言ってくれたのです。中国の歴史に対しあこがれていたこともあり、大学では中国語を専攻し、英語は第2外国語として勉強すればいいのだと気がつき、中国語学科に志望を変更しました。そして、何校か受験し、1校だけ合格したのが、第一志望の大学でした。

まったくわからなかった中国語

大学2年生の夏休みに、初めて1か月間北京に短期留学しました。それまで日本で、先生について一生懸命勉強していたので大丈夫だろうと思っていました。ところが、こちらの言うことは何とか通じ

るのですが、相手の言っていることが全然わからないのです。まだまだダメだということを痛感し、それから必死にヒアリングに取り組みました。

どうやってヒアリング力の向上に努められたのですか。

中国映画ばかり見ていました。大学2年から4年まで中国映画の自主上映活動をして

いるボランティア組織に所属し、多くの作品を見る機会に恵まれました。これが勉強になり、中国語の感嘆表現なども、どういう風に使うのかわかるようになりました。

「日本・中国青年親善交流」事業に参加して印象的だったことは何ですか。

訪中時の思い出が3つあります。一つ目は廈門市を訪問したことです。沖合にコロス島と呼ばれるリゾート地があり、かつてイギリスの租借地だったので、ヨーロッパ風の建築物が並んでいます。音楽教育に熱心な土地で、街中を散策していると、あちこちからピアノを練習しているのが聞こえてきました。ほんとうに美しい街でした。

実は、この名物料理がカプトガニなのです。海鮮料理のお店の前にたらいが置いてあって、中にカプトガニがうじゃうじゃ入っているのです。店員さんが、どれがいいですか、と訊いてくれるので、指定するとその場で調理してくれました。味付けはスパイスチリソースで、ほとんど身のない蟹を食べているようでした。日本では天然記念物に指定されているカプトガニを女性団員3人で食べたことが忘れられません。

二番目は、廈門での月餅争奪戦です。日本では中秋の名月に月見団子を食べますが、中国では月餅を食べます。月餅のまるい形は家族団らんを意味していて、家族全員で月餅を切り分けて食べます。



廈門聾啞学校を訪問

高屋敷雪乃さんの経歴

- 1995年 「日本・中国青年親善交流」事業参加
- 1996年 神田外語大学外国語学部中国語学科卒業
天馬株式会社入社
(中国および台湾との輸出入業務担当)
- 1997年 中国政府奨学金生として北京大学へ留学
- 1999年 漢語水平考試(HSK)事務局にて勤務開始
- 2000年 外務省在外公館派遣員試験(中国語)に合格
- 2002年 外務省職員中途採用試験に合格
大臣官房国際報道官室へ配属
- 現在 大臣官房人事課勤務

私たちは、さいころを振って目の数が多かった人が月餅を食べるというゲームをしました。本当は勝った人が月餅を食べるのですが、その日は、訪問する先々で月餅が出て、飽きるほど食べていたので、負けた人が月餅を食べることにしました。

三つ目は、9月18日に天津で怒鳴られたことです。レストランで夕食を終えて、外で日本語で話しながらホテルに戻るバスを待っていました。すると突然、通りがかりの年配の中国人男性から「9・18バカヤロー」と日本語で怒鳴られました。この日は満州事変が起きた日だったのです。ほんとうに驚きました。中国側の受入れを担当している中華全国青年連合会の方が「気にしないでくださいね」と気を遣ってくださいましたが、「いいんですよ。本当のことですから。私たちも知っておかなければならないですね」と言ったのを覚えています。

中国を訪問して、日本人として感じたことは何でしたか。

廈門大学を訪問すると、「抗日戦争勝利記念50周年」という横断幕がありました。中国側は気を遣って、私たちに見せないようにしていましたが、見えてしまうのですよね。でも、それを見たからといって私たちが気分を悪くすることはありませんでした。事実ですから。

廈門で家庭訪問をし、月餅争奪戦をしていたところ、訪問先のおじいさまが出てこられました。この方は戦争を体験しておられ、「昔、ここにも日本軍が来て、その庭先に爆弾が落ちたよ」と淡々と日本語でおっしゃいました。「でも、もう昔のことだし」とも言われました。

私は中国語で何か言おうとしたのですが、言葉に詰まってしまい何も言えませんでした。それで、中国側の通訳の方を通じて日本語で「そのことについては、日本人として本当に申し訳なく思います」

と申し上げました。涙がこぼれそうでした。

中国へ行くといつも感じるのが、日本人は加害者だということです。日本にいと、被爆した日本など、被害者としての面が強調されます。確かに、被害も大きかったのですが、その歴史も語り継いでいかなくてはなりません。しかし、一方で、中国、アジアでの加害者としての歴史も知らなければなりません。日本には被害者の歴史と加害者の歴史の両方があると感じます。

この事業に参加して得たものは何でしたか。

「つながり」ですね。この事業に参加するまでは私の友だちとは同じ年代の人が大半でした。でも、中国派遣団の中には、団長や副団長といった年上の方や、同じ団員でも社会人のお兄さん、お姉さんがいます。年齢はさまざまですが、中国に対する熱意や感動といった共通の土台があるので、初対面でも「何年度の派遣団員ですか」とか「〇〇さんをご存知ですか」などと言って、お友だちのお友だち…のようにどんどんつながっていきます。参加年度や事業を越えてつながりができていきますね。

個人的なことですが、この4月に結婚したときにも、団長、副団長が結婚式に来てくださいましたし、中国団員OBだけのテーブルが一つできました。10年前にこの事業に参加しなかったら、こんなにもいろいろな方とつながらなかったと思います。本当に貴重な機会でした。

同窓会の立ち上げ

私たちが参加した年から中国派遣団同窓会の活動が始まりました。人と人のネットワークの広がりを実感しましたし、前年度参加された方と協力し合うことができました。幹事は前年度の団員が務めることになっています。毎年、次の年に派遣される方に宣伝して、参加するように



事後活動に積極的に参加

勧めています。今年は9月24～25日に実施されました。開催場所によっては参加するのが難しい方もいらっしゃると思いますが、毎年なんとか続いています。また、中国から訪問団が来日されたときには、アテンドのお手伝いをさせていただいたこともよい思い出です。

在外公館派遣員として北京へ

大学卒業後はしばらく民間企業で勤務しましたが、どうしても中国に行きたかったので、会社を辞め、1年間北京大学に留学しました。帰国して、日本の大学の恩師が紹介してくださったHSK（漢語水平考試）試験の事務局のアルバイトをしながら就職活動をしていました。

そのころ、外務省の在外公館派遣員の募集を見つけ、受験しましたが、落ちてしまいました。それで、平成6年度中国派遣団員であり、瀋陽で在外公館派遣員をしていたお友だちにいろいろ教えてもらって試験対策をしました。そして、2回目には運良く合格し、北京の日本大使館で勤務することになりました。

具体的にはどんな業務だったのですか。

現地職員や運転手への指示、ホテルの予約や航空券手配など、庶務的な仕事が多かったと思います。でも、私が配属されたのは経済部で、経済部長の秘書的

な業務を行いました。ここには、財務省、経済産業省、環境省、国土交通省、日本銀行などからの出向者が大勢いて、経済関係の情報収集をしていました。

経済部にいるのは経済の専門家ばかりでした。いっしょに食事をすると、皆さんのお話を聞いていると、わからないことも多いのですが、それでもおもしろいなと思いました。人間的にすばらしい方が多く、私は上司にも恵まれ、外務省を職場として希望したいと思うようになりました。

小泉総理大臣にお茶を出す

大臣や国会議員などの要人が訪中したときは、万が一に備えてホテルに詰めるのも私の業務でした。要人がホテルに滞在している間は廊下に控えていて、お湯が出ないとか、空調を調整したいなど、何か要人からリクエストがあったら、すぐに対応していました。

北京大使館で勤務していた2年間に、小泉総理大臣が3回訪中されました。総理にお茶をお出しするのも私の業務でした。総理は玄米茶やほうじ茶などの日本茶がお好きだと聞き、それを入れて総理に持って行った時には、手が震えて本当に緊張しました。

外務省職員への道

在外公館派遣員の任期が切れる直前に、外務省の中途採用試験があるが受けてみないかと上司から言われました。それで、日本に帰国し、筆記試験と日本語、中国語の面接試験などを受け、採用していただきました。

最初に配属されたのは国際報道官室でした。外国プレス対応をしている部署で、APやロイターなどに日本の外交政策に関する記事を書いてもらうのです。こうした記事は日本理解にもつながりますので、外務省から情報を提供するようにしています。

国際報道官室は、総理大臣または外務大臣が外国訪問をする際には同行することになっています。総理に同行する記者が何十人もいますので、そうした方のお世話や、取材に協力するのも業務です。総理が外国に行くと、現地のプレスが総理にインタビューさせてくださいといて取材に来ます。総理が時間を取れない場合には、代わりに国際報道官が対応します。私はそばでメモを取るのですが、英語が得意でないのととても大変でした。後で、取材のテープおこしをするのですが、夜中の2時までかかったこともありました。

うれしいこともありました。総理の出張には、外務省からは報道課と国際報道官室、総理大臣官邸からは官邸報道室の方が同行されます。あるとき、私が中国派遣団員だったときの副団長が官邸報道室の職員としていらしゃったのです。副団長と一緒にお仕事ができるとは、本当に光栄なことでした。

それ以降、総理の出張に同行するときには、同行者名簿を調べて、副団長の名前を見つけるとうれしかったものです。

初めての出張はエチオピア・アンゴラ・南アフリカ

外務省での初めての出張では、川口大臣に同行してエチオピア、アンゴラ、南アフリカに行きました。エチオピアへは、まず、JALでフランクフルトへ行き、そこからは民間航空機を1機借り上げてエチオピアに行きました。エチオピアからアンゴラへは直線ルートだと近いのですが、紛争地帯の上空を飛行することになり、撃ち落とされるかもしれないからというので、遠回りをしました。

ようやくたどり着いたアンゴラでは、大臣が地雷原を視察することになり、私も同

行しました。荒野にロープが張ってあり、その向こうには地雷が埋設されているということでした。まさか、そのような場所へ行くとは思っていませんでしたので、スニーカーなど持って行っておらず、ヒールサンダルを履いて行きましたら、踵のストラップが壊れてしまったことを思い出します。

事業に参加されたばかりの方へメッセージをお願いします。

この事業はとても貴重な機会を与えてくれますので、できるだけ多くの方に参加してもらいたいと思いますし、同じ派遣団の人はもちろん、参加年度や参加事業を越えて、一生の付き合いになるような絆を保てるとうれいですね。



全国人民代表大会常務委員を表敬訪問

～インタビューを終えて～

「日本・中国青年親善交流」事業に参加されたときの思い出、大学生の時の中国旅行の様子をいきいきと語る高屋敷さんは本当にうれしそうでした。テレビに中国の景色が映ったり、中国語が聞こえたりすると、中国語の響きが自分を捕らえて離してくれないような気がするとおっしゃっていました。心の底から中国がお好きなのだなと感じずにはいられませんでした。

「ギニア 達^{たつ}の恩返しプロジェクト」やった!井戸完成!

第18回「東南アジア青年の船」事業参加青年
 第31回「東南アジア青年の船」事業 ナショナル・リーダー
 株式会社ミキハウス 人事採用担当
 43か国5万5千キロ 自転車世界一周 坂本 達



数年前、「自転車世界一周」の特集をしていただいた坂本です。昨年は「東南アジア青年の船」事業のナショナル・リーダーをさせていただきます。お世話になりました全国

IYEOのみなさん、(財)青少年国際交流推進センター、管理部、関係者のみなさん、本当にありがとうございました。

今回は世界一周中の「命の恩人への恩返しプロジェクト」で、西アフリカのギニアに井戸が誕生したご報告です。資金は拙著「やった。」の印税です。ご協力くださったみなさん、ありがとうございました!仕事の傍ら2年間がんばってきました。

僕はずっと、自転車は自分の力で走るものだと思っていました。でも、そうではないと気づいたのは、ギニアでマラリアと赤痢を併発して倒れたときです。まったく動けなくなってしまい、「スタートして7か月目にして世界一周も終わりか……」、と思いました。

今でもよく覚えています。このときに出会ったギニア人医師

シェリフは「日本人もギニア人も肌の色は違うが同じ人間。心配ない、僕が世話するよ」と、汗でつつるになった僕の手を握り締めて言ってくれました。どれだけホッとしたことでしょう。

彼が病気を治してくれたのですが、あとでよく聞くと、彼はなんと村の最後の薬を使って僕を治療してくれていたのです。村長は貴重なニワトリを僕のために差し入れてくれました。献身的に接してくれた彼らは一銭も受け取ってくれず、村を出発できたときは、「自分は走ってきたのではなく、走らせてもらっていたんだ……」と痛感し、ペダルをこぎながら涙が止まりませんでした。

こうして助けられたお礼に何かできないかと、2年前シェリフのお父様の住むドンゴル村へ向かいました。そこは井戸も病院もなく、乾期には雨も全く降りません。谷を流れる僅かな水も様々な病原菌や寄生虫、動物などに汚染されていて風土病の原因となっていました。村人たちは、「薬も不足しているが、とにかく、薬よりきれいな水が欲しい!」と繰り返していましたので、井戸を掘ることになったのです。



シェリフ(左)と井戸掘り職人たちと



◆プロジェクトの軌跡◆

2003.7	第1回目渡航 ギニア視察 シェリフに再会
2003.11	第2回目渡航 深井戸から浅井戸に変更
2004.12.17	第3回目渡航 プロジェクトスタート!
2005.1.10	井戸から水が出始める!
2005.3.12	村人がバケツをたらして使用開始
2005.4.19	3か月ぶりに連絡が入る 4回目渡航決定
2005.5.20	第4回目渡航 首都コナクリ到着
2005.5.26	シェリフとドンゴル村入り
2005.6.1	手押しポンプ設置、完成!竣工式!

このプロジェクトは、ただ井戸を掘るのではなく、管理組織作りからスタートさせました。最も大切な井戸の維持管理は、村人による「水管理委員会」が行います。水を使用する家族が少しずつお金を積み立てて、修理代やパーツ代を賄うのです。井戸の修理や掃除も各担当が行います。

1年半の準備を経て、2004年12月、掘削を開始しました。大きな機械であつという間に掘るのではなく、村人が2か月半、朝から晩まで

職人と一緒に土地を開き、ツルハシとスコップとバケツで土を掘り出し、遠くから水を運んでセメントを混ぜ、砂利を集めて井戸の周りに敷き、動物よけの柵も作りました。子どもからお年寄りまで、みんなが汗を流して手伝いました。井戸掘り職人の寝泊りや食事も、すべて村人が負担しました。その結果、井戸に対するオーナーシップの意識もとても高くなったのです。そして今年の6月、4回目の渡航にして、直径1.4メートル、深さ15メートルの手押しポンプ付の井戸が完成しました。みんなの「水が欲しい!」という強い思いが一つになって実現したのです。

竣工式の日。いつもより着飾った村人がバケツを持って集まってくるのを見ていると、胸がいっぱいになります。村長、地区代表、イマーム(イスラムの指導者)たちが参加して、スピーチ、テープカット、くす玉、そして女性たちによる歌と盛り上がりました。

途中で投げ出しそうになったこともありましたが、村人たちの笑顔を見たときに「やってきてよかった!」と素直に思えました。特に女性が手を叩いて喜んでいました。これで汚染された水に

よる、子どもたちの病気、感染症、寄生虫疾患、下痢などが減るはずです。

このプロジェクトは、時間、情報、資金など非常に限られていましたが、日本から何度も足を運んで話し合いを続け、言葉を覚え、一緒に食事をい



2005年6月1日、竣工式!

ただき、一緒にお祈りすることで理解と協力が得られたと思います。また井戸掘りの知識、経験、NGOの組織力など皆無の自分が、「人が健康に暮らす手段の実現」に関わることができたのは、すべて「人

とのつながり」によるものでした。

自転車世界一周もそうでしたが、今回も「必要な時に必要な助けが現れる」ことがよくありました。外国人を見ると法外な値段をふっかけてくるギニア人もいます

が、本当に善良でボランティア精神旺盛な井戸掘り業者に巡り合いましたし、数秒遅れていたら一生出会うはずのなかった人に、喉から手が出るほど欲しかった井戸の情報をもらうこともありました。村に戻る交通手段が完全になくなってしまった夜に、ありえないタイミングで車が現れたり、デジカメのメモリーがなくなってお手上げになっていたら、ソーラーパネルを持つドイツ人がCDに焼いてくれたり。自分の力だけではどうにもならないことが、ひとつの出会いや小さなきっかけから実現していく。そんなことの連続でした。

一連の活動をしていて気づかされることは、「チャンスは足元にある」ということ。自分の気持ちの持ち方や、小さな行動ひとつが結果を大きく変えていく、そんな当たり前のことです。

会社勤めをしながらこういった活動ができることにも、感謝の気持ちでいっぱいです。「すごいですね!」と言っていただくこともありますが、本当にすごいのは、こんな自分を理解してくれ、応援してくれる周りの仲間です。また物心両面で支えてくれるスポンサーや、忠告をしてくださる方、講演会で声をかけてくださる方、すべての方々に感謝です。進めば進むほど「応援してくれる人たちのおかげだな」と感じていました。

シェリフの次の夢は、まともな診療所がない彼の住む地域に、きちんとした診療所を作ることです。僕も生かされた命を駆使して、彼と地域の人たちに役立つ活動を続けたいと思っています。これからもあたたかい応援、よろしくお願い致します!



井戸の前でドンゴル村の人たちと。やった!

コラム

坂本 達 公式HP
<http://www.mikihouse.co.jp/tatsu>

フォトエッセイ「やった。」

写真・文:坂本 達 三起商行株式会社

印税は全額お世話になった世界の方々へ役立てます。

今年、第10刷になりました!



山梨県IYEO料理交流会(ブラジル料理)

山梨県青年国際交流機構 会長

第18回「東南アジア青年の船」事業参加青年

松川裕子

山梨県IYEOでは8月7日(日)、『国際交流をしながら味わおう おいしいやまなしを』というイベントを名水の里 白州町で行いました。ブラジル、タイ、日本各国の家庭料理を地元山梨の食材をふんだんに使って参加者が作り、味わい、友達の輪を広げました。参加者は県内在住の外国人、日本人合わせて60名で大変賑やかでした。

国際交流員で日系ブラジル人の田中エリカさんが紹介して下さったパステウ(ブラジル風揚げぎょうざ)を披露します。パステウにはヴィナグレッチというサラダを付け合わせます。



▲子どももお手伝い



材 料



「パステウ」

(具はお肉とチーズの2種類) の材料

(4人分)

牛挽肉 …………… 150g

ハム …………… 100g

玉ねぎ …………… 半個

にんにく …… ひとかけ

モッツアレラチーズ

(シュレッダー状のもの) …………… 40g

パステウの皮 (ない時は春巻きの皮) …………… 2パック

オレガノ(粉末)

塩、こしょう、揚げ油



▲パステウ

「ヴィナグレッチ」の材料

キャベツ …………… 8分の1個

トマト …………… 2個

玉ねぎ …………… 1個

ワインビネガー … 50cc

オリーブオイル … 100cc

塩、こしょう、少々



▲ヴィナグレッチ(サラダ)

作り方



- 1) ヴィナグレッチを作る。玉ねぎはみじん切りにして水にさらし、水気をきる。キャベツは太めの千切り、トマトは角切りに。これらの野菜をワインビネガー、オリーブオイル、塩、こしょうで味付ける。
- 2) (a)みじん切りにした玉ねぎとニンニクを炒め、さらに挽肉を入れて炒める。塩、こしょう、オレガノで味付けをする。
(b)ハムをさいの目に切り、チーズ、オレガノとまぜておく。
- 3) パステウの皮をめん棒で薄くのぼし(1~2mm)、ナイフで四角に切る。くっつかないように打ち粉をふる。
- 4) 生地の上に具(a)(b)のをせて半分に折り、端をフォークで押さえてしっかりくっつける。
- 5) 4)をこんがり揚げペーパータオルの上で油をきる。

コラム

パステウにはとり肉、海老、春雨、びん詰めのパルミット、ゆで卵、オリーブなどいろいろな具を包み、それぞれの家庭に自慢の味がある。特にパルミットを入れると本格的。

*パルミットとはヤシの新芽でホワイトアスパラガスに似ている。サラダに入れてもおいしい。ゆでたけのこで代用もできる。

*パステウの皮、パルミットはブラジル食材を扱うお店かグルメスーパーで手に入る。

「地球のステージ」とワークショップ

茨城県青年国際交流機構 副会長
第11回「世界青年の船」事業参加青年
福山誠二郎



2005年9月11日(日)、茨城県IYEOはつくば市の筑波学院大学(門脇厚司学長)において、「地球のステージ」公演とワークショップを主催し、会員や一般の参加者、155人にご参加いただきました。「地球のステージ」とは、イラク、ソマリア、東ティモール、パレスチナなどの紛争地域や難民キャンプでボランティアとして医療救援活動を行っている精神科医の桑山紀彦氏が1996年から始めたコンサートで、各国で自ら撮影した映像と、活動の経験を込めた自作の歌や語りで構成されています。「心で感じる開発教育」として全国で好評を博し、1000回近くもの公演が行われてきました。公演日は9.11の同時多発テロから4年、そして茨城県知事選挙や衆議院議員選挙とも重なり、参加者が自分の住む地域/世界などを考えるきっかけとなれば、という想いで準備しました。

今年度の茨城県IYEOは6月の関東ブロック大会、県の青年海外派遣事業とタイアップした7・8月のタイ語講座など活発に活動してきました。地元根付いた活動を目指してきたものの、今回のような一般の方々を主な対象としたイベントの主催は、初めての試みでした。思いを同じくした県事業の既参加青年の協力も得て広報活動などの準備を進めました。

当日は約15名のスタッフと共に、朝から集客状況や自分の冒頭のあいさつを心配しながら、会場設営や機材搬入を行いま

した。無事に桑山氏を迎え、約2時間のステージが始まり、胸打たれる音楽、軽快な語りと快活な子どもたちの表情がとても印象的でした。

公演後は、参加者が公演をきっかけに考えたことを共有する場を提供しようと、茨城県IYEOオリジナルのワークショップを行いました。役員研修で学んだことを応用して準備し、KJ法を進めました。慣れないことをして初めは戸惑っていた参加者も、発表時には生き生きとしていて、このような場を持ててよかったと言ってくれました。

参加者のアンケートでは概ね良好な感想をいただきました。ただ、もっと大勢の人に参加してもらいたいという意見が多くありました。また、「地球のステージ」は、パート2、3と続くのですが、それらを希望する方も多くいらっしゃいました。今後、効果的な広報活動を考え、実現できればと思います。

今回実行委員長として、一般のお客様を迎える際の段取りや、IYEO内外のスタッフで構成される組織での指示の出し方、地域に根付いた活動や広報活動の難しさなど、学ぶ点が非常に多くありました。これらの課題は、他県のIYEO活動にも共通することではないでしょうか。今回の体験を共有し、各県の活動の活性化に役立てばとの思いを強くしました。

参考：NPO法人「地球のステージ」<http://e-stageone.org/>



▲会場入り口



▲公演者の桑山紀彦氏



▲展示を見る参加者

Aceh is Now?～教えてメックス!私達にできることは?～

京都府青年国際交流機構 地域交流部部長

第9回「国際青年育成交流」事業（メキシコ）参加青年

浅野恵美子

京都IYEOでは、平成17年8月23日（火）に「Aceh is Now? ～教えてメックス!私達にできることは?～」と題した国際交流イベントを行いました。

「東南アジア青年の船」事業既参加青年であり、元京都在住のメックスさん（インドネシア・バンダアチェ出身）をゲストにお招きし、現地復興の状況を生で聞こうという企画です。メックスさんは、災害発生後の2005年2月にバンダアチェへ帰国、国連機関において現地の復興支援活動に献身しています。その



▲笑顔のすてきな子どもたち

彼が8月に京都へ一時帰国するとの情報を受け、急遽この企画を立ち上げました。

テーマは

①インドネシア・バンダアチェの現状を知る

②気付き・出会いの場の提供

の2点です。

仲間であるからこそこの問題を身近に感じることができる今の境遇に感謝し、少しでも多くの方にこの「感覚」を体験してもら



▲インドネシア・バンダアチェの子どもたち



▲泥水の中を走る車

◆メックス、ウィナからのメッセージ◆

（英文の要旨）

I would like to thank my IYEO friends for their "love and prayers" to help Aceh after tsunami. We hope after this tragedy, our friendship will be stronger than ever.

And we also hope life in Aceh will get better from time to time.

With lots of love, Mex and Wina

津波後のアチェを支援するために、IYEOの友人の皆さんからいただいた「愛情と折り」に感謝したいと思います。この悲劇の後、私たちの友情がかつてなかったほど強まることを願っています。アチェでの生活が改善されていくことも願っています。

メックスとウィナより



▲メックス（左）と姉のウィナ（右）



▲詩を朗読するウイナさん



▲メックスの話に聞き入る参加者

える機会を提供したいという思いを込め、単なる講義形式ではなく、IYEOらしさをもった温かいイベントになるよう話し合いを重ねました。

彼の姉ウイナさんによる詩の朗読や、「アチェ・リリーフ」の田中さんによるライブも実現。会場であるラジオカフェで毎週ラジオ放送をしておられる「難民ナウ！」の宗田さんとも御一緒させていただき光栄でした。

他団体の方も含め、皆の思いが一つになり、よりよいイベントを作り上げようとそれぞれの立場で精一杯頑張った結果、予想を大幅に上回る47名の方々が参加され(ゲスト・スタッフを含めると55名!)成功裏に終えることができました。心に残る出会いと今回培った絆を、これからも大切に育てていきたいと思ひます。

◆イベントを振り返って◆

久しぶりに会ったメックスが、以前にもまして力強く元気になっていたことがとても嬉しく、再会の喜びと同時に、生きていることの素晴らしさを心の底から実感しました。「アチェに来て、子供たちと一緒に遊び笑い合ってほしい。それが何より彼らへのプレゼントになる」という彼らしいメッセージが印象に残っています。

また、ウイナや他団体の方と共にイベントを作り上げていく中で、助け合いの大切さやありがたさを痛感し、出会い→繋がり→絆へと培われていく過程を通して、人間皆持ちつ持たれつ、何事も成せば成る、願いはかなうことを改めて体感しました。

小さな単位ではありますが、国際交流に触れる機会を地域の方々に提供でき、共に充実したひととき

を過ごせたことを心より感謝しています。

今後も常に自分を磨き、努力精進していきたいと思ひます。

どうもありがとうございました。



◀スタッフ一同

熱い思いをスリランカへ！

京都府青年国際交流機構

第5回「青年の船」事業 参加青年

奥西 伊佐男

8月4日、コロンボ空港へ直行便で深夜に到着、兄弟家族総出の熱烈歓迎を受け、実に33年ぶりにスリランカの地を踏んだ。文化大臣の秘書官である友人(スガタ・パティナヤカ)とは、20年ぶりの再会である。私が総理府(現内閣府)の「青年の船」でスリランカを歴訪したときに出会い、以来家族ぐるみの長い付き合いをしている。彼の兄弟も家族とともに何度も我が家を訪問している。

彼の住む町マータラは、国土の南端の海岸線近くに位置し、昨年末のスマトラ沖地震による津波が直撃した。地震直後の混乱で連絡が取れず安否を心配していたが、友人と兄弟家族は幸いにも全員無事であった。しかし、彼の親戚や多くの友達が犠牲になっていた。再会の喜びとは裏腹に胸中複雑であったが、無事に再会できたとい

う安堵の中で、彼は復興に至る経緯を話してくれた。

マータラでは、海岸沿いを中心に、一瞬にして2,000人が犠牲となり、10,000人の住民が家を失い、今なお多くの人々が学校や寺院、仮設住宅で避難生活を続けている。彼の弟(ウイナシリ)が町の復興のボランティア責任者に任命され、連日、回復に向けて兄弟で取り組んでいる。家族と家を失った50人の遺児のために、ボランティアで孤児院を建設することになり、既に着工しているが、町の有力者等の寄付だけでは建設に必要な金額に達せず、遠く日本の友人にも支援を切実な思いで求めているという。

彼らの願いを受け、事後活動の一環として、同じ「青年の船」でスリランカに寄港した全国の仲間に、それぞれ地域や所属団体等での義援金活動呼びかけをもらった。そして、賛同いただいた多くの方々の真心をスリランカの彼の住む町へと橋渡しした次第である。

翌朝、マータラの復興の様子を見て回った。海岸近くに市場とバスターミナルがあり、街の中心地となっている。多くの買い物客でにぎわっていた午前9時、5メートルの津波が一瞬にして押し寄せた。波でバスが店舗の屋根に

押し上げられたり、乗用車が2階の窓に飛び込んだりするなど、想像を絶する悲惨な光景であったという。海岸近くの病院では、動けない多くの患者が犠牲になり、刑務所が全壊して囚人20人が逃げ出したが、後に全員捕まったということである。

つぎに、建設中の孤児院を見学。鉄筋2階建ての予定であるが、とりあえず集まった寄付で1階部分のみ12月の完成を目指し、工事が行われていた。今後寄付が集まり次第、2階



▲友人(スガタ)の家族と文化大臣秘書官



▲義援金の受け渡しを行う

[左から順に] 宮本晴市氏、スガタ氏、ウイナシリ氏、筆者

部分の工事を進めると説明してくれた。

マータラから西海岸をコロンボに向け車で北上。海岸線は線路と平行し、果てしなくヤシ林が続く。西海岸にもかかわらず約90キロにわたって、小さな集落と線路がかなりの被害を受け、海岸にはところどころ船が真っ二つに裂けたまま放置されている。道沿いには黒色給水タンクが並び、いたるところに爪痕が残る。板を貼り付けただけの小さな仮設住宅とテントが目につき、復興には遠い道のりを感じずにはいられない。当初、政府は6か月で復興できると述べていたが、その後、海岸から100メートル以内での建設を禁止したため多くの問題が発生し、予定は大きくずれ込んでいるようだ。

日本でも大きく報じられた、列車ごと押し流された4両編成の残骸が痛々しく線路沿いに展示されており、見物客がたえない。当時、乗客と共に周辺の住民が安全な場所を求め殺到し、1,500人の命が奪われた。周辺の避難民の子どもや、幼い子どもを抱いた母親が「ギブミー」と歩み寄る。

未曾有の大災害は、まさに、歴史に残る大惨事で、不幸にして亡くなられた邦人をはじめ、20数万人に及んでいる犠牲者に、心から哀悼の意を捧げたい。命の尊さを痛感し、

平和に暮らせる幸せに改めて感謝しなければならない。

しかし、あれだけの災害であったにもかかわらず、この被害は、次々と発生する世界的な社会事象にともすれば打ち消されがちである。地震からやがて一年を迎える今、予測のできない現代社会において、有事にいったい何ができるのかを真剣に考えさせられた。

今回の行程は、コロンボ、キャンディー、マータラを結ぶ南西部600キロを3日間、車で駆けめぐる旅となった。滞在中、彼と兄弟の家族から心のこもった最高のもてなしを受け、最後まで手を振って見送ってくれた彼らに再会を誓い、語りつくせない多くの感動と思い出を胸に、一路日本へとスリランカを後にした。

今後も、事後活動は自らに課せられた使命と受け止め、生まれ育った地域での社会奉仕に加え、全国の仲間との人的ネットワークの中で、生涯をかけて国際貢献をしたいと思う。また、そういうエネルギー集団である仲間を国内外に持てることを幸せに思う。

国際的な支援活動からすれば小さな民間外交ではあるが、多くの方々の真心を橋渡しできることが、私にできる何物にも代えがたい事後活動と自負している。

終わりに、今回のスリランカへの旅に理解を示してくれた職場に感謝し、支援活動にご協力いただいた多くの皆さんへの現地報告としたい。



Warmth of Rising Sun

The 17th Ship for World Youth program
Steven Handy, Canada

I traveled many places in Japan, and for two and a half months I was surrounded and embraced by the complexities and beauty of Japan; your history, culture, customs, and nature.

I was amazed by the contrasts experienced in Japan. There are huge modern cities and small country towns, flashing neon lights and paper lanterns, toilets with computers next to simple squat toilets, shinkansen trains and "ukai" fishermen, ringing cell phones and the sound of wooden "geta." I really like how the traditional mixes with the modern.

I also experienced the magic of the Matsuri! In Kitakyushu I participated in the Kokura Gion Taiko Matsuri with the "Wai Wai" NTT Taiko team! I also saw an Eisa festival in Okinawa, and in Kagoshima I watched hundreds of people carry "mikoshi" through the streets and I saw the Sogadon-no-Kasayaki festival.

While traveling in Japan many people apologized to me for not speaking good English! Native English speakers often take it for granted that many people are interested in learning this language, and because of this interest communication is possible. I believe everyone should feel proud of their hard work to learn another language, and not feel bad about how well they speak it. I should have worked harder to speak more Japanese, it is the one thing I regret.

So you can understand that my Japanese is bad, and sometimes friends would laugh because I seemed to know lots of not-so-useful words, like "amayadori" or "butsudan." There were moments when I was just one of many tourists, but many times I had special experiences because of my SWY friends. I hope to return again to Japan.

Maybe you are wondering what I bought for a souvenir? A pair of "jika-tabi"!



日の出のめくもり(英文の要旨)

第17回「世界青年の船」事業 カナダ参加青年
スティーブン・ハンディ

2か月半の間、日本のもつ複雑な面や美しさ、つまり、日本の歴史、文化、習慣、自然に囲まれていました。

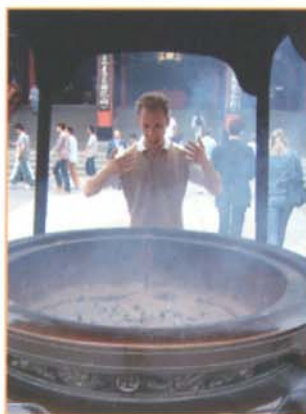
巨大な近代都市とこじんまりした田舎の町、点滅するネオンサインと紙でできたちょうちん、コンピュータ仕掛けのお手洗いに質素な和式お手洗い、新幹線と鶏匠(うじょう)、携帯電話の着信音と下駄の響き。伝統的なものと近代的なものが混ざり合っている様子が本当に好きです。

北九州では小倉祇園太鼓保存振興会のNTTグループ「わいわい倶楽部」に参加。沖縄ではエイサー祭り、鹿児島では何百人もがみこしをかついで通りを練り歩くのを見学、「曾我どんの傘焼き」も見ました。

旅行中には、英語がうまく話せなくてごめんなさいと言ってくれる人が大勢いました! 英語を母国語とする者は、外国人が英語学習に関心を持つのは当たり前だと思いがちですが、皆さんが英語に関心を持ってくれるおかげで、コミュニケーションができます。私は日本語が話せるようにもっと努力すればよかったと思います。

私の日本語もひどくて、役に立ちそうにない「雨やどり」とか「仏壇」といった言葉をたくさん知っているの、友人たちが笑うことがあります。自分がごく普通の旅行者の1人のように感じることもありましたが、「世界青年の船」事業の友人たちのおかげで、特別な体験をしていると思うことのほうが多かったのです。

お土産に何を買ったと思います? 地下足袋ですよ!



▲Senso-ji (浅草寺)



▲Kokura-Gion (小倉祇園)



「世界青年の船」事業 インターナショナル・リユニオン参加者募集!



SWYAA International Reunion in Port Louis, Mauritiusが第18回「世界青年の船」事業におけるモーリシャス、ポートルイスの寄港日程に合わせて行われます。
※SWYAA : Ship for World Youth Alumni Association

日程 : 平成18年2月11日(土)~2月16日(木) (5泊6日)

開催地 : モーリシャス (ポートルイス)

参加費 : ¥40,000 (参加費US330\$及び換金・送金手数料、事前・事後事務経費含む)

(参加費には、5泊6日の宿泊費、食費、移動費が含まれます。※自由時間の食費、移動費は自己負担)

SWYAAインターナショナル・リユニオンは、IYEOとSWYAA Mauritiusが共催で実施する公式プログラムです。このリユニオンでは、第18回「世界青年の船」事業参加青年との交流や、「にっぽん丸」船上で行われる公式レセプションへの出席、リユニオン参加青年による今後のネットワークについてのディスカッション、モーリシャスにおける社会貢献活動などが予定されています。

また、船上以外の楽しく有意義なプログラムもモーリシャス事後活動組織によって準備されています。

【申し込み方法】

参加を希望される方は、日本青年国際交流機構(IYEO)ホームページ<http://www.iyeo.or.jp>、または「世界青年の船」事後活動組織ホームページ<http://www.swyaa.org>から申し込み用紙をダウンロードしてお送りください。または、事務局へ直接お問い合わせいただければ、申し込み用紙をお送りします。(FAX・郵送可)

※日本からの参加者については、IYEO事務局が書類や参加費のとりまとめを行いますので、必ず事務局へご連絡ください。

【締切】 12月5日(月) ※申し込み用紙必着

【IYEO事務局】

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14
東京海苔会館6階

日本青年国際交流機構 (IYEO)
SWYAAインターナショナル・リユニオン
担当: 田中 佐代子 swyreunion@iyeo.or.jp

☆御質問等がある方は、お気軽にお問い合わせください。皆様の応募をお待ちしています。



◆リユニオン スケジュール(予定)◆

平成18年

- 2月11日(土) 参加青年到着・市内散策&フリー
- 2月12日(日) オープニングセレモニー・市内散策、翌日のプログラム準備
- 2月13日(月) にっぽん丸(第18回「世界青年の船」参加青年)出迎え
リユニオン参加者による船上プログラム・レセプション
- 2月14日(火) フィールド・トリップ
- 2月15日(水) 社会貢献活動、フィールド・トリップ、フェアウェルセレモニー
- 2月16日(木) 帰国

Schedule



グローバル・フォト・コンテスト (日本青年国際交流機構設立20周年記念事業)



Global Photo Contest 2005 開催



Global Photo Projectは、2004年3月に内閣府主催で実施された「世界青年の船」事業「既参加青年東京連絡会議」にて、日本青年国際交流機構(IYEO)と世界10か国からの代表者によるプロジェクト案「芸術イベント」を、日本の会議実行委員会を中心とするSWYAA Art Project Teamが具体化させたものです。2004年には国内と世界に広がる会員のネットワーク強化を目的として第1回Global Photo Contestが実施され、2005年3月の「既参加青年東京連絡会議」では、事後活動の活性化を促進するプロジェクトとしてGlobal Photo Contestの継続が決定されました。

このプロジェクトは日本青年国際交流機構(IYEO)が取りまとめ、海外への広報及び写真集約については、「世界青年の船」事業事後活動組織(The Ship for World Youth Alumni Association, SWYAA)が協力。今年度は「ストリート・マーケット」をテーマとした写真を世界中から集め、投票し、最終的に30点の写真を選定します。選ばれた写真をパネルにし、Global Photo Box IIとして日本全国・世界各国で展示会や説明会を行います。

昨年第1回目コンテストの入賞作品は、すでに世界各国、日本各地から貸し出し依頼があり、展示されています。皆様の応募をお待ちしています！

主催／日本青年国際交流機構 (IYEO)
 主管／グローバル・フォト・コンテスト事務局
 後援／(財)青少年国際交流推進センター
 応募資格／日本青年国際交流機構 (IYEO) 会員
 応募テーマ／「ストリート・マーケット」※皆様オリジナルの
 写真をお待ちしています。

ねらい

- ・世界中から素材を集め、国際理解を深めることを目的としたキットを作る
- ・日本青年国際交流機構(IYEO)会員が国際交流を思い出すきっかけを作る
- ・日本青年国際交流機構(IYEO)会員の活動活性化につなげる
- ・事業、世代を越えた交流ができる場を提供する



応募方法

- 応募の際には、所定の申込書に必要事項をご記入の上、作品とともに、**2005年12月31日(土)**(当日消印有効)までにIYEO事務局へ郵送、またはメールでお送りください。申込用紙はIYEO事務局から取り寄せていただくか(FAXまたは郵送いたします)、ホームページ(<http://www.iyeo.or.jp/swyaa/photo/>)からダウンロードしてください。
- 応募は一人2点までです。未発表のものに限ります。写真1点につき応募用紙1枚をご使用ください。入賞の有無にかかわらず、応募作品は返却しません。
- デジタル画像は、入賞作品を展示可能なサイズに拡大する都合上、画素数**300万画素以上**のデジタルカメラを使用し、**ファインモード**以上で撮影された作品に限ります。
- カラープリントL判サイズ。カラーネガ、カラーライドともに紙焼きにしてご応募ください。

スケジュール

2005年10月1日／応募受付開始

2005年12月31日／応募締め切り

2006年2月1日～28日／電子投票(ホームページ)

2006年2～4月初旬／公開投票／集計

2006年4月中旬／結果発表(ホームページ)

2006年5月／マクロコスム誌上にて

結果発表

2006年5月～6月／Global Photo Box II 完成

日本各地・世界各国貸し出し

開始、展示会実施



【お問い合わせ・お申し込み先】 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階
 日本青年国際交流機構 (IYEO) グローバル・フォト・コンテスト事務局 Globalphoto2005@aol.com

日本青年国際交流機構第21回全国大会 宮城大会

IVEO20周年記念日本酒限定頒布

宮城IVEO及川会長が3年がかりで作った日本酒が完成!! 減農薬無化学肥料栽培の山田錦100%の純米吟醸酒です。全国大会宮城大会のみの限定頒布。辛口・甘口(各720ml 1,900円)と微発泡(300ml 700円)の3種類をご用意しました。お味とラベルは当日のお楽しみ♪

飲みに来て
けさいん



「ターニングポイント」が本になります!

日本青年国際交流機構設立20周年記念企画として、マクロコズムでは、昨年11月号より各界で活躍中の既参加青年にインタビューする「ターニングポイント」を連載しています。この度、過去の「ターニングポイント」をまとめ、さらに数名の方に新たにご登場いただいて一冊の本にし、全国大会宮城大会で頒布する予定です。購入をご希望の方はe-mail: macrocosm@iyeo.or.jpまたはtel:03-3249-0767までご連絡ください。頒布価格は1冊¥1,000+送料です。

「ターニングポイント 新しい自分を発見して——人生の転機となった10人の物語」の目次より

- ・寺下 英明 第3回「青年海外派遣」(国際経済コンサルタント)
- ・河合 純子 第4回「青年海外派遣」(「日本・カナダ会」事務局代表)
- ・オノ ミユキ 第1回「国際青年育成交流」(タンザニア)(漫画家)
- ・高屋敷 雪乃 第17回「日本・中国青年親善交流」(外務省職員)
- ・奥野 照義 第1回「青年の船」(南太平洋トンガ王国観光省駐日代表)
- ・平野 正俊 第12回「青年の船」(「体験学習農園」キウイフルーツ・カンントリーJapan代表)
- ・谷口 智子 第6回「世界青年の船」(外資系金融機関勤務)
- ・小野田 幸子 第1回「東南アジア青年の船」(静岡コンベンションビューロー サポート通訳)
- ・坂本 達 第18回「東南アジア青年の船」(自転車で世界一周しちゃったミキハウス社員)
- ・小谷 みどり 第18回「東南アジア青年の船」(人の生死を見つめるシンクタンク研究員)



平成17年度青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)一覧

ブロック	開催県	開催日	ブロック構成都道府県	会場
東海	静岡県	平成18年 1月28日(土)、 29日(日)	静岡・愛知・岐阜・三重	●1日目 島田市地域交流センター「歩歩路」 (島田市7968-5) ●2日目 お茶の郷博物館 (島田市金谷3053-2)
九州	大分県	平成18年 1月28日(土)、 29日(日)	福岡・佐賀・長崎・熊本・ 大分・宮崎・鹿児島・沖縄	未 定

今月号の表紙

グローバル・フォト・コンテスト

🇯🇵 日本青年国際交流機構
(IYEO) 会長賞受賞作品
「無我夢中」
吉田龍洋 (SSEAYP22)



編集後記

P.10-11「ギニア 達の
恩返しプロジェクト」に
あるイラストは、坂本達
さんのお知り合いの漫画
家 平田哲郎さんが描いて
くださいました。原稿内
容が細部にまで忠実に再
現されているイラストで、原画を受け取ったときには、
その繊細さに驚いたほどです。大勢の方のご協力により
11月号も無事完成し、感謝しています。ご意見・ご感想は
e-mail:macrocosm@iyeo.or.jpまでお願いします。(ふ)



MACROCOSM 11月号 Vol.67

2005年11月1日発行(隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋

人形町2-35-14 東京海苔会館6階

TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: http://www.centerye.org

(CENTERYE)

http://www.iyeo.or.jp (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定 価 198円(本体189円)

印刷所 柏木印刷株式会社

TEL:03-5395-3954 FAX:03-5395-8213

since
1884
Pioneer Of
Cruise



USPH（米国公衆衛生局）は米国に入港する客船に対して毎年検査を行って衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満点中99点を取るなど、日本船では最高の評価を5年連続で獲得しています。



冒険する生活
にっぽん丸



イベントを仕事と考えるのはダメ。
まずは、とことん自分が楽しまなくちゃ。

にっぽん丸クルーズスタッフ 澤田 紀子

ビンゴ大会からデジゲームまで、イベントが催される場所にはクルーズスタッフ澤田の姿が必ずある。お客さまの船内生活に活気と笑顔を与えるイベントの数々。そんな心弾むひとときを、より楽しく、スムーズなものに仕立てるのが彼女の仕事だ。「もともとは、私自身がお茶の先生として乗船していたのですが、いつの間にかクルーズを陰から支える裏方に魅力を感じてしまって…もう10年になります」。1年の内、その9ヶ月ほどをにっぽん丸で過ごすという澤田。陸上の生活が恋しくなることは「まったくない」という。「だって、毎日がお祭りや、世界中を旅してまわる。その上お金がいただけるなんて、これほど贅沢なことはありませんよ」。だからこそ、職務においては心しなくてはならないことがあるのだと…「イベントを仕事と思っただけではダメです。まずは自分が楽しまなくちゃ、お客さまだって楽しくないはず。私たちの役目は、お客さまと一緒にとことん自分が楽しむことに尽きますのよ」。大いに盛り上がった時夜のビンゴ大会、そこでプレザーをまとい祝賀として進行アシスタントを務めていた澤田。そして今日のお茶会を前に、その姿はなんと清楚な着物姿。ちょっと澄ました彼女も、また素敵だった。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

開国と維新の街 平戸・防府クルーズ

横浜→平戸→防府→横浜
2005年12月13日(火)～12月18日(日) 167,000円

サンタクルーズ横浜

横浜→横浜
2005年12月18日(日)～12月20日(火) 88,000円

名古屋ワンナイトサンタクルーズ **名古屋発着**

名古屋→名古屋
2005年12月22日(木)～12月23日(金・祝) 40,000円

サンタクルーズ神戸 **神戸発着**

神戸→神戸
2005年12月24日(土)～12月26日(月) 88,000円

oasis にっぽん丸

横浜→横浜
2006年3月3日(金)～3月5日(日) 98,800円

屋久島・甌島クルーズ **博多発着**

博多→屋久島→甌島→博多
2006年3月13日(月)～3月16日(木) 110,000円

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名ご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。

商船三井客船
 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三倉ビル5F MOPASは商船三井客船の登録です。
 お問合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。
 クルーズデスクフリーダイヤル 0120-791-211
 <http://www.mopas.co.jp>

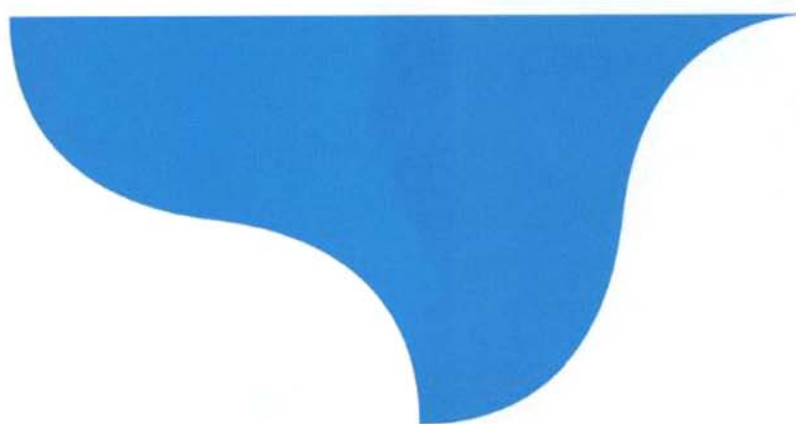


NIPPON MARU

東急観光から

トップツアーへ

～ 夢へ翔びたつ青い鳥。わたしたちがトップツアーです。～



TOPTOUR

2006年1月31日、創立50周年、

「東急観光株式会社」は「トップツアー株式会社」へ社名を変更します。

いま私たちは新しい未来へ向かって羽ばたき始めました。

The 50th Anniversary



東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員

〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 <http://www.tokyukanko.com> <http://tour.tokyu.com>

マクロコズム

2005年11月号

通巻六十七号隔月発行

定価一九八円(本体一八九円)

編集協力...

内閣府政策統括官
(共生社会政策担当)
日本青年国際交流機構